

奥会津の
ミュージアムを
巡る



ライフミュージアムネットワーク2020
奥会津スタディツアー記録集

奥会津の ミュージアムを 巡る

イラストレーターの小池アミゴさんが、
奥会津のミュージアムを巡り、
出会いを綴った旅の手帳です。

- 01- 柳津町
- 02- 三島町
- 03- 只見町
- 04- 金山町
- 05- 昭和村



奥会津

奥会津という名の博物館で、
懐かしき未来と不便という豊かさに出会う。

小池アミイゴ

自分にとって美術館の楽しさってなんだろうって考えてみた。人がこさえた絵や彫刻に姿勢を正し静かに向き合う場所。そうしている自分を好きだと思える場所。ひとつはこんなことだと思う。もうひとつは美術館までの道を歩くこと。大抵の美術館は、街路樹など植えられ美しく整えられた舗道の先にあつて、そこに至る路を歩いているうちに、日常という慌ただしきものから解放され、美術館のドアを開ける手前では心が「美を求める人」に切り替わっている、そんな過程が好きなんだよな。

そうそう、美術館から出る瞬間も好きだ。なんだろう、美しき何ものかに出会った自分が、陽に当たり生まれ変わったような気分。そう、だ、美術館に行くときは、帰り道が暗くなってしまう時間を選んでいたのは、そういうことだったのかと思う。

「アミイゴさん、奥会津に行ってみてください」そんなお話を聞いた2017年5月25日、人生2度目の会津にして初めての奥会津の只見へ。只見線の運行本数を調べ、ちよつと絶望的な気持ちにもなりながら旅のスケジュールを決める。会津は一瞬一瞬の光がとても美しい季節で、ボクの視線は永遠に車窓の外に向けられる。ひと山越え顔をした場所であることが、とても幸せなことだと思った。

只見川のうねりに沿って連なる人里の美しさ。重なる山の稜線から漏れてくる日の光は、川面で複雑な反射を見せ街を包む。「子どもたちと一緒に絵を描いてください」というオーダーに応え、晩秋と真冬の時を過ごした街で、ボクは「子どもたちから柳津の魅力を教えてもらう」プログラムを提案。

柳津の街を子どもたちの背中を追って歩いてみると、空気の冷たさも、踏みしめる枯葉の音も、降り出した雨も、子どものいたずらに小言するオトナも、みんな愛しきものとして、自分の足の裏から体内に染み込んでくる。そうした活動の拠点が、齋藤清美術館という端正な顔をした場所であることが、とても幸せなことだと思った。

齋藤清という「ひとり」が捉えた会津での人の営みの構図には、大きな余白が置かれていて、それと向き合う人は、その余白の中で自分というものに再会出来たり、今の自分に出会えたりするのだろう。ボクは柳津に行くに必ず齋藤清美術館に寄り、齋藤清と視線を重ね、今見えるものを確認することを飽きることなく続けている。消費されてしまわぬ絵画と向き合う時間。もしそれが都会のギャラリーだとしたらどうだろうか？柳津の光をくぐりたり着く美術館は、柳津の光を思いっきり吸い込むように設計され、足の裏に残る落ち葉を踏みしめたり雪に足をとられた感覚や、子どもたちと交わした他愛も無い会話の火照りが失われぬまま、ギャラリーへと運んでくれ、ギャラリーの扉を開ける時にはすっかり柳津の空気をまとい、齋藤清視線を重ねるひとりとしての準備が出来ているんだ。

と光が別のもの変わったような、なんだろう？光の粒子がより細かく砕け、霞のように柔らかに輝いているイメージ。霞のような光に包まれた場所というのが奥会津の最初の印象。列車と並走する只見川の存在感がなかなか手強くて、初めましてのボクの心に湧いてくる少なからずの恐怖。川口から代行バスに乗り継いで間も無く、日は山陰に隠れ視界はほとんど暗くなり、並走する只見川は深く暗い谷のように見える。只見に着くと辺りは真っ暗で、6月も近いというのに肌寒くてね、地図で見ると東京からそれほど遠く無いはずなのに、つくづく遠くに来てしまったんだって思った。

明けて早朝の只見を歩く。
それは初夏の高原。光の美しさはそのまま只見の美しさ。昨晚のあの真っ暗けは消え去り、ただただ嬉しくなって街を歩きまわり、只見川に沿って駆け出して、大きなダムまで見に行った帰り道、ただみづなと川のミュージアムに出会う。今まで駆け回っていた只見がどんな場所なのか、汗が乾くと共に知識も身に染みる確かさ。地域全体がミュージアムであつて、その翻訳機のような存在が「みづなと川のミュージアム」ってことなんだろう。ともかく、この美しさの背景には取り返しつかない喪失も、人の力では抗うことの出来ぬ自然の厳しさもあることを知り、あらためて、この美しさが特別のものだと身体で覚えることの出来るミュージアムのあり方。すごいぞ！奥会津。

会津からひと山越えて出会った「霞のような光に包まれた場所」は、奥会津の柳津という街だつてことを後から知る。

奥会津の土地勘に疎いボクは、今自分がどこにいるのか見失うことが多い。それは山に囲まれた土地で太陽を見失い、東西南北の感覚が狂うからだろう。また、大きくうねる只見川やそこに注ぐ無数の支流の流れを目で追うことで狂う方向感覚というものは、『川は北から南に向かって流れ太平洋に注ぐ』という常識に縛られた関東者ならではのなんだとも思う。幹線道路である国道252号線から脇道に入ると、さらにその狂いは増し、山間の道を進むことはちよつとした冒険のようさにさえ感じる。そんなだからフと現れる集落に出会うと、安心感と共に深いため息をつくのだ。「人はなぜここで暮らすことを選んだんだろう？」そのため息は大自然の中にあつて人への興味から生まれる。気をつけて見ると、出会う集落それぞれに何かしらの特徴があり、それはその集落の人の仕事のあり方によるものと気がつく。農業、林業、養蚕、河川工事、ダム建設、それぞれの集落にはそれぞれ特化した仕事のあり方があり、それが地域に豊かさを与えてきたことを、端正に整えられた集落の姿から想像する。

三島町との出会いもそんなため息と共にあつた。只見川に沿った細長い低地に連なる美しい街並み。ここで人が生きることの意味を想像することの喜び。幹線道路から隠れるように建てられた「生活工芸館」で三島町の生活に触れることで、ボクは人というものにあらためて再会したように思う。

山に暮らせば山の素材を使い、雪が深ければその時を生かすことを考える。加工しづらいはずの草や樹皮を素材とし、緻密に編み込まれる編み組細工。人のこさえるものの価値を知るとは、都会で生き続

けるものの責務のように感じる。ただ「責務」などと語りつつも、それはとても懐の深い優しさで固められたものなんだ。

金山町の只見線会津川口駅あたりは、広大な奥会津の中でも古くから人の往来の拠点となってきた場所のようで、街並みも街道の宿場町を匂わせるものだ。それでも、駅前の食堂の女将さんから聞く「凄すぎる獵師のオヤジさんの話」に目を丸くしながらラーメンをすすするなんてのは、やはり奥会津ならではのなあ。川口から只見川を背にし、只見川の支流である野尻川沿いの道を山を分け入るように入道に進む。飛び飛びに現れる集落は、川口とは違った文化を宿したものであるんだらうなど、家の作りなどから感じる。ひとつつ街道を曲がれば、ひとつ川を渡れば、ひとつつ山を越えれば、それぞれの文化や働き方が息づいているという多様性に出会うことこそ、奥会津を巡る楽しさではないかと思う。

しばらく行くと美しい集落に出会い、そこにはやはり美しいまま保存されている旧玉梨小学校の校舎が「金山町自然教育村会館」と名付けられ、地域の人々が使いついでた民具の数々が所せましと置かれている。今は予約しなければ中に入れず、ここをどうやって活用して行くかは、金山町のこれからの課題であるようだ。

ただ、今後立派に整備される可能性を待つまでもなく、ただこの場所に立ってみたいいなと思う。子どもたちが駆け回っていたらどううちょうど良い狭さの校庭は、それを見守ってきた大きなイチヨウの木と美しい校舎に挟まれていて、今は地域の方がグラウンドゴルフなんち良さ。

昭和村では村の特産品である「からむし織」をもっと深く知ってもらうため、さらには村の人口減を止める意味も含め、「からむし織体験事業」を発想し、日本の各地から体験生「織姫」を集めてきた。村外から人を呼び込むことは、村内に軋轢を生むこともあったはずだが、しかし、それ以上に人を受け入れることを当たり前とする気風が、それこそからむしを育て、いくつもの工程を経て美しい織維へ、織物へと育ててゆくのと同じく、昭和村に確かに根付いていったのではないかと、雪道ですれ違えばあちゃんの気持ちの良い会釈から想像。子どもたちとのワークショップで「おばあちゃんたちとご飯を作って食べて絵にする」ということをやってみたら、なるほど、昭和村の大先輩たちの教え上手と言ったら！

すごいな、昭和村。ものづくりが人づくりである哲学を、人口減の危機感から手繰り寄せてきたんだ。

昭和村の道の駅には「からむし工芸博物館」があり、ボクたちはそこでからむしの歴史や技術を知識として得ることが出来ます。その知識は併設された「織姫交流館」での織姫さんたちの実際の作業に触れることで、フィジカルな記憶となり、さらに村で出会ってお年寄りと呼ばれることで知恵に変わり、ひと一人が生きることを後押ししてくれる確かな力にさえることなのだと思う。

かしている。そこから視線をちょっと上げると見える集落の風景。そんな風景の構図が、人というものを感ぜさせてくれる。誰かが知らない場所で地図を眺めるだけで計画したのではない、人の歩幅で測られ生まれた集落。そこに集った子どもたちの記憶。「川口は只見川の文化で、ここはやつぱ野尻川の文化なんですよ」と土地の人が語る。その言葉には確かな豊さの記憶が刻まれている。ボクは人が生きるに足る最先端の場所にいるような感覚をここで感じるのだけど、みんなはどうなんだろう。

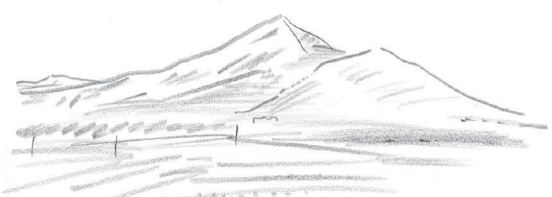
玉梨から野尻川を辿りさらに山を分け入り進むと、空気がフワッと入れ替わる感覚。空気が綺麗になったとかではない、なんというか整った空気に自分の姿勢が正されるといったイメージ。

昭和村は東京の山手線の範囲ほどの広さに1200人ほどの人が暮らす村。ボクは2年に渡り真冬の昭和村にアトリエを構え、子どもたちと絵を描いて遊ぶプロジェクトを重ねました。良い空気を吸って育ってきた子どもたちに与えるべきものはなんだろう？昭和村を包む空気の正体を知らぬまま、先回りして子どもたちになにか与えてしまっているのだろうか？山と山とに囲まれた美しき村では『東京から来たアーティスト』なんて存在はただ陳腐なだけ。そうして、まずは子どもたちと遊ぶことから始めて、それを手掛かりに子どもたちを見守る人々に触れ、自分自身を徐々に昭和村に馴染ませてゆくと、昭和村の人々、特にお年寄りがよそ者のボクに向ける視線がとても自然なものであることに気がつく。人口1200人の村で、不審な視線を投

地域と美術館や博物館との補完的な循環関係から育つ人。それはやはり時代の最先端を歩く人のように思い、そんな人の姿を日本の各地で目にするのが出来たら、今どうしても感じてしまう生き苦しさってものから解放された、一人ひとりそれぞれの輝きで満たされた社会が生まれやすいか。

そんなことを考えながらの帰り道。峠を越えると会津。会津も奥会津と変わらず、会津らしい美しさで出迎えてくれる。

ただそこは、奥会津という広大な美術館だか博物館だかの出口のように感じたのだ。





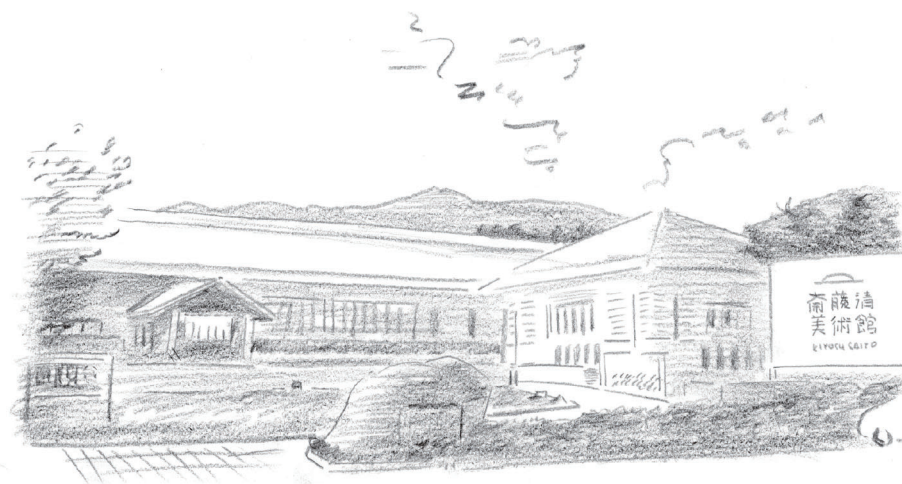
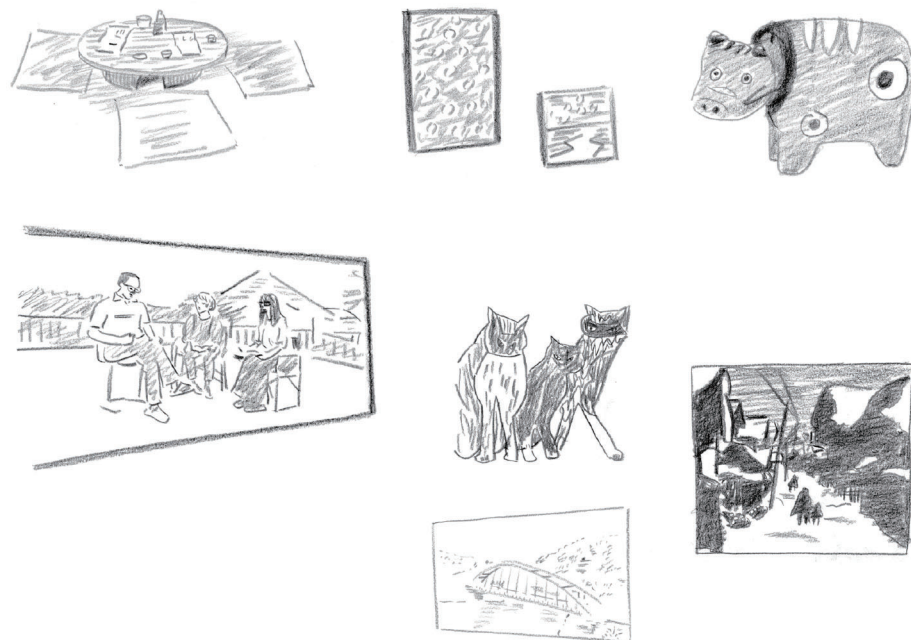
やないづ町立齋藤清美術館

1997年の開館以来、現代版画の一時代を築いた齋藤清作品の収蔵と展示を行う国内唯一の美術館です。

学芸員の伊藤たまきさんが語るのは、終始齋藤清への愛であると思いました。

そんな齋藤清美術館は、アーティストの滞在型の制作現場としての機能も発揮。

この地の高低差や寒暖の差、暮らしの伝統や多様性などが、今のアーティストの新鮮な視線で切り取られ再構築されているのに出会うことができます。



やないづ町立齋藤清美術館

〒969-7201 福島県河沼郡柳津町大字柳津字下平乙 187

TEL 0241-42-3630

開館時間 9:00 ~ 16:30 最終入館は16:00まで

休館日 毎週月曜日(祝日の場合はその翌日)その他、年末年始・展示替えのための臨時休館あり。

一般料金 大人510円/高校・大学生300円/小・中学生無料

団体料金 大人410円/高校・大学生300円/小・中学生無料
(15名以上)

奥会津には齋藤清美術館がある。柳津町の端正な造りの美術館で出会えるのは、齋藤清という奥会津に恋をした者の視線と構図。

白と黒の明快なコントラストで構成される深き雪の風景。しかし、自然が作り出す起伏はその構図に危うさを与えているように見えます。そのコントラストと危うさの際に描かれる人のシルエットの儂なき美しさ。その姿に自分というものを感じられたら、ぜひ柳津の地も歩いてみてください。只見川沿いの遊歩道から虚空蔵尊までは誰でも歩くはず。そこから特に目的を定めず、柳津の街中を歩いたり、田んぼや畑を縫う農道を歩いたり、橋を渡り河岸段丘の上に点在する集落を辿ったり。深い渓谷や巨大なダムに出会ったり、どこからか聞こえる只見線の汽笛に耳をすませたり。只見川や豪雪に削られ生まれた土地の高低差や、季節の空気や音色、そこで暮らす人の気配を体に取り込んだ後、再度齋藤清美術館へ。

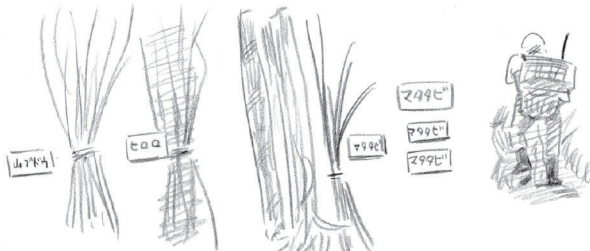
儂きシルエットの人はより愛しきものへと昇華してないだろうかなんてね。それはとても贅沢な経験であり、そんな齋藤清の視線と構図は柳津を越えて続く奥会津の地でも、土地や人と心で通じ合う翻訳装置として機能してくれるはず。



三島町生活工芸館

山ブドウの皮、マタタビ、ヒロロなどの素材で編んだ国指定伝統的工芸品である奥会津編み組細工を常時展示販売しています。

館長の二瓶さんからは、三島町の産業構造と伝統的工芸品の制作の関係性などをうかがいました。農地が少なく林業やダム工事の拠点として発展した町。それから今に至る人口減の現実。そしてものづくり三島の矜持。そうしたことを町内のおじちゃんおばちゃんたちの立場に立って、家族のここのように親しみを込めて語ってくれたのが、うれしかったです。



三島町生活工芸館

〒969-7402 福島県大沼郡三島町大字名入字諏訪ノ上 395

TEL 0241-48-5502

FAX 0241-52-2175

E-mail kougeikan@town.mishima.fukushima.jp

開館時間 9:00 ~ 17:00

休館日 月曜日・祝日の翌日・年末年始

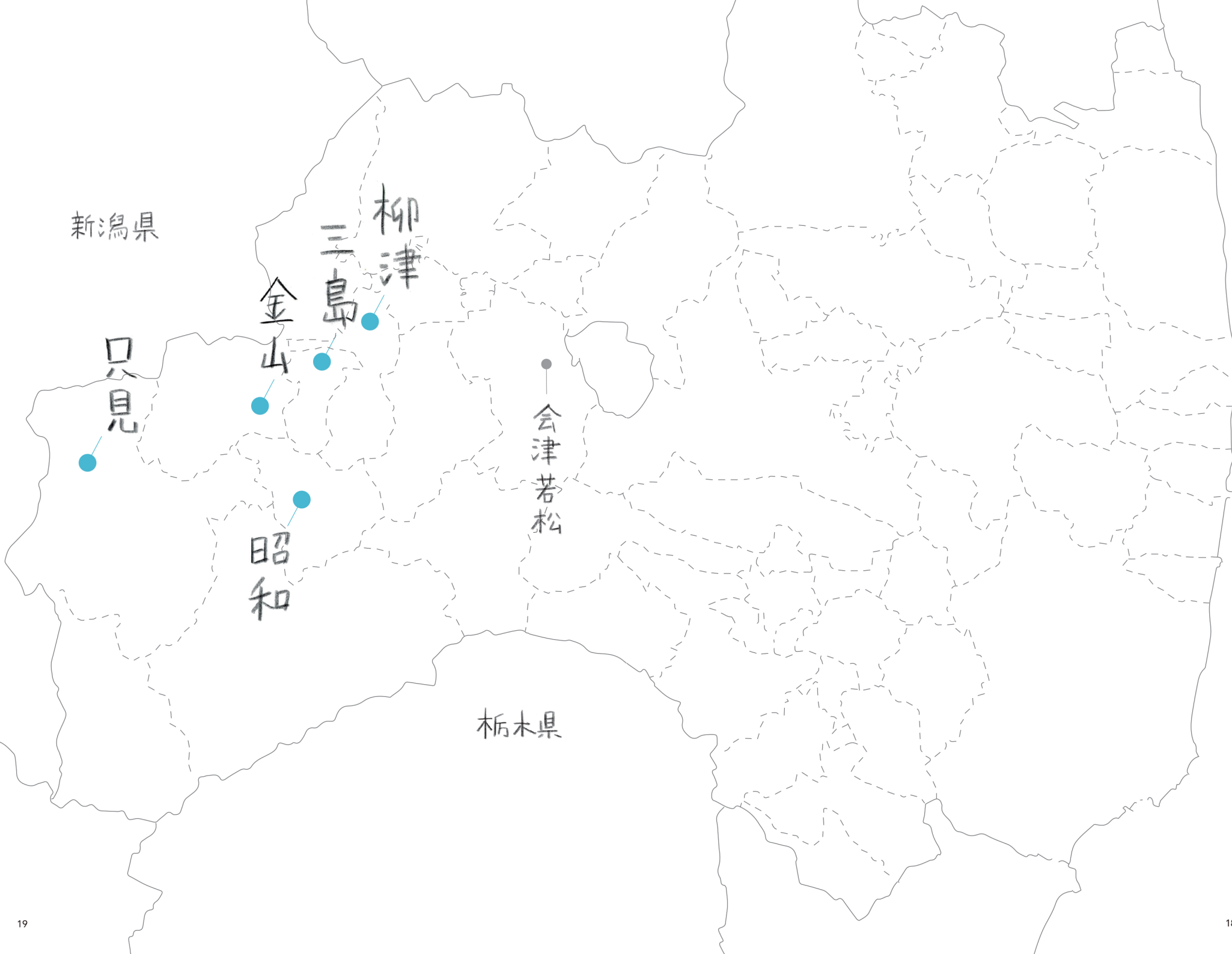
料 金 無料

企業誘致やリゾート開発に頼るのではなく、人の個性や活力を尊重する町づくりの模索を始めた三島町では、1981年、古くから受け継がれてきた農作業具や生活用品を地域の地場産業へと育て、地域の魅力にしてゆく「生活工芸運動」が起きます。その際に造られた生活工芸館では、今も「ものづくり」の拠点として、伝統的工芸品「編み組細工」などの技術指導が行われています。

山ブドウ、ヒロロ、マタタビなどの天然素材に何重もの工程をかけ「編める素材」に育て、人ひとりの気の遠くなるような手間が注がれ編み上げられる美しい手提げカバンやバッグ。「これはどんな人が作ったのだろうか？」と担当者にうかがうと、たいていは高齢者であり、多くの方が仕事をリタイアした後には研修を受けて始めたとのこと。今も変わらぬ車座膝付き合わせで手渡されてゆく技術の現場。

生活工芸館は森の中にひっそりと佇む風情で、外に開かれてあるイメージはありません。ただ、その成り立ちを知ると、それはそのまま三島に暮らす人たちの愛しき顔つきであり、ここは日本の最先端の場所なんだとさえ思えてくるのです。





新潟県

只見

金山

三島

柳津

昭和

会津若松

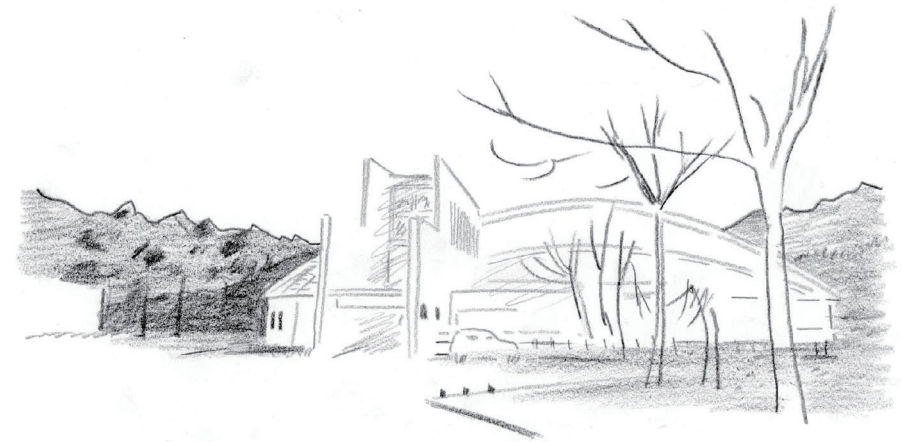
新潟県



ただみ・ブナと川のミュージアム

只見町のブナと自然をテーマにした常設展示や、映像の上映、只見町に生息する動植物の標本を展示しています。また、年に4回の企画展を行っています。

学芸員の中野さんは森の研究のスペシャリストとして、只見の森の価値を熱く語ってくれます。ユネスコエコパークに登録された只見の未来は、ここでの学びを受けた子どもたちの情熱の一環が集まり、流れになることで創られるように思いました。ではその流れでどんな遊びが出来るのか、これからはそんな発想が流れ込む拠点に育ってゆくように思いました。



ただみ・ブナと川のミュージアム

〒968-0421 福島県南会津郡只見町大字只見字町下 2590

TEL 0241-72-8355

FAX 0241-72-8356

E-mail info-buna@amail.plala.or.jp

開館時間 9:00 ~ 17:00 最終受付は 16:00 まで

休館日 火曜日(祝祭日の場合は翌平日)、年末年始

一般料金 高校生以上 310 円 / 中学生・小学生 210 円

団体料金 高校生以上 260 円 / 中学生・小学生 160 円
(20名以上)

※「ふるさと館田子倉」との共通券のため、両方の施設に入館できます。

※未就学児、只見町内在住の小・中・高校生、障害者手帳をお持ちの方は無料(受付でご提示ください)

※団体および展示案内をご希望の方は、ホームページよりフォームに記入してメールまたはFAXでお送りください。なお、お電話で連絡いただければ幸いです。

※20名以上の団体の火曜定休日の見学についてはご相談ください。

世界のどこよりも多くの雪が降る日本の奥会津。只見にいたら、まずは町を囲むようにして並ぶ山をぐるっと見回してみましよう。雪なだれでえぐり取られた雪食地形の山々が連なる荒々しい景観。懐の深い優しさを感じるブナの森。開発に伴い植樹された針葉樹林の濃い影。美しい田畑と人の暮らしの整った空間。そして母なる只見川。それら明快なコントラストを持つものが、絶妙なグラデーションの中で共存している姿を確認しながら、ブナと川のミュージアムまで歩いてゆけたらいいな。

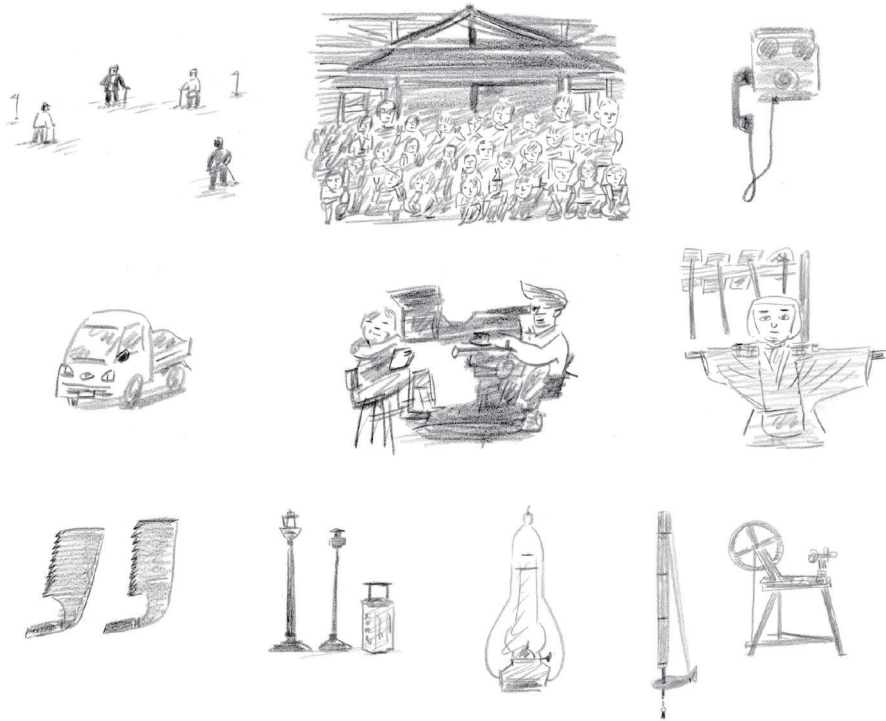
冬の豪雪のイメージを持って向った夏の只見は、思いがけず陽の光が強烈で、美しい高原植物の花の影が、舗装された道路にハッキリとした影を映して揺れていました。そうした肌感覚を携え出会う知識としてのブナの森の意義。さらには、意外や経済的に豊かであった米つくりの里としての古の只見。只見で得る体験と知識は、奥会津に暮らす人々、さらには日本のローカルに暮らすことの意味を更新して考えるきっかけを与えてくれるだろうし、なにより、これから未来を生きる人間が、自然と文明が交わるキワを見極め、持続可能な世界を実現させるためのインスピレーションを与えてくれるはずだ。



金山町自然教育村会館

金山町自然教育村会館に大量に収蔵されている民具は、地元の名士栗城弥平氏が個人で集めてきたもので、「弥平民具」と呼ばれています。

この館を案内してくれた、金山町教育委員会の五ノ井さんの当面の課題は、この場所をどう活用してゆくのかということ。行政の枠組みでやることと共に、弥平さんのような方が一人現れるだけで一気に動くこともあるだろうなど、ここを訪れる人からのアイデアにも期待を寄せているようです。



金山町自然教育村会館

〒 968-0014 福島県大沼郡金山町大字玉梨字上中井 1384

TEL 0241-54-5360 (金山町教育委員会代表)

※現在 (2021年3月末) 一般公開を常時はしておりません。

見学をご希望の方はお電話でお申し込みください (土日祝日を除く)。

日本の各地を巡り気がつくのは、どんな地域でも必ず小学校の立派な校舎と出会えること。過疎と呼ばれる土地であっても必ず、その規模は小さくても人の心の宿る校舎に出会え、その姿からその土地に暮らす人々がなを未来に託したのか察することが出来るのです。金山町でも、昭和13年に建てられ昭和52年に廃校になった旧玉梨小学校の校舎に出会うことが出来ます。ヨーロッパ調の美しい木造2階建の校舎は、一時期は都会の子どもたちのサマースクールを数多く受け入れていたそうです。今は主に所狭しと並べられた民具の展示館として再生利用されています。校舎の目の前に程よく広がる校庭。大きな銀杏や杉の木の向こう側、一段低い土地では集落のカラフルな屋根が楽しそうに並んでるのが見えます。校庭では地域の方がグラウンドゴルフなどやっています。そのお邪魔にならぬよう校庭を走り、そのまま集落の路地を駆け下り野尻川の川岸まで。そこからまた集落を抜け小学校まで。足の裏から土地を知ることが出来たら、収蔵されている民具の一つひとつに込められた生活者の知恵を、より身近なものとして自分の体の中に取り込めるかもしれません。そしてここから今自分が暮らす土地、もしくは日本や世界なんてものを思うことは、とても新鮮な経験になるはずですよ。



からむし工芸博物館

昭和村は、昔から変わらぬ手法で高品質な「からむし」を作り続けてきました。人と植物の営みを未来に伝える博物館です。

福岡から昭和村に移り住み、からむし工芸博物館の学芸員に成りたての松尾さんは、まずは知識としての「からむし」を誰よりも学ぼうとしていました。その姿は恋に落ちた青年のよう。昭和村ではそんな恋心を抱く人に出会ってばかりです。そんな一人ひとりの恋心が尊重され束ねられることで、からむし工芸博物館が学びの場所を超え、より地域発展の拠点へと育ってゆくことを「未来」と呼べたらいいなと思えました。



からむし工芸博物館
〒968-0215 福島県大沼郡昭和村大字佐倉字上ノ原1(道の駅からむし織の里しょうわ内)
TEL 0241-58-1677
開館時間 9:00～17:00 最終受付は16:30まで
休館日 年末年始 ※展示替等のため臨時休館する場合あり。
一般料金 高校生以上 300円 / 小・中学生 150円
団体料金 高校生以上 250円 / 小・中学生 100円 (20名以上)

只見川の流域からひとつ山を越えた土地、昭和村。「からむし」を育て、使える素材に作り変え、糸を績み、機織りをし、生活に役立てる。冬の豪雪に抗うでなく、与えられた条件の中でやるだけのことをやる。そんな生活の必然から生まれる「からむし」が、いつしか貴重な現金収入をもたらすものとなる。さらには、過疎から地域を守る戦略としての「からむし織体験生事業」が発案される。そんな世界の最先端のような発想は、昭和村が山に囲まれた、ある意味閉ざされた空間であるからこそのように思います。雪に閉ざされた長い冬は、人にとつぷりの想像の時を与えてくれます。

からむしの製造工程やそれに関わる多様な仕事を知ることの出来る博物館で出会うのは、人の想像の時間が編み上げられたものであり、しかし、そこには過度な重さは無く、ただただ軽やかに、アートなどと呼ばれるものを軽々と飛び越えた美しきものとして、都会に生きる私たちに感動を与えてくれます。

そうして歩く昭和の里では、ずっと伸びた道の両側に広がる田んぼの美しさ。急なカーブを曲がると出くわす集落の端正な面持ち。眼前に迫る自然の厳しさと優しさ。軽やかな声で挨拶を交わしてくれる村の人々。その全てが作品のように思えるのです。

まづい、

奥会津が切れてきた。

小池アミイゴ



ライフミュージアムネットワークからあなたへ

ライフミュージアムネットワークが、奥会津のミュージアムを巡る旅に気づいたのは2019年のこと。「いのち」と「くらし」をキーワードに東日本大震災からの学びをどう現在と未来に活かせるかをミュージアム的手法で考えようとしていたライフミュージアムネットワークの前に、奥会津は「ライフ」を学ぶ豊かなフィールドとして現れました。過疎高齢化という言葉で表現される地域の鏡裏の姿は、「いのち」に向き合い「くらし」を自らの手で丁寧につぐ人々の生き

る土地でした。

柳津町、三島町、只見町、金山町、昭和村。2018年、奥会津の5町村のキーパーソンからそれぞれの土地の歴史と文化に根差した生き方、暮らし方をお聞きし、それらを多くの人と学ぼうと2019年にスタディツアーを企画しました。そこで出会った5町村にあるミュージアムはそれぞれ土地の個性を象徴するような存在でした。奥会津の5つのミュージアムを巡るスタディツアーを予定した2020年。新型コロナウイルスの感染拡

大によりバスツアーは中止し、参加者の方が各自現地集合で参加する連続オンラインディスカッションと、イラストレーターの小池アミイゴさんに5つのミュージアムを巡るリサーチをお願いしその記録をまとめる形をとりました。

本記録集は、小池アミイゴさんの奥会津リサーチの旅の手帳であり、リサーチで生まれたアミイゴさんのテキストと作品に導かれながら奥会津の5つのミュージアムを巡る旅にあなたを誘う本でもあります。それぞれの町・村の個性

を伝えてくれるミュージアムを足掛かりに奥会津が私たちに渡してくれるたくさんのことを受け止めたら、どうぞ本記録集の余白に自由に書きこんで（描きこんで）ください。その時、本記録集を小池アミイゴさんとあなたの「奥会津のミュージアムを巡る旅の手帳」にしていただけです。さあ、ぜひ奥会津へ。「いのち」と「くらし」が健やかに息づく学びの地へお出かけください。

福島県立博物館は、2011年の東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故後、文化庁の支援を受けた「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」「ふくしま震災遺産保全プロジェクト」の事務局をつとめ、さまざまな文化芸術による復興支援事業を実施してきました。

その過程で浮かび上がってきた課題は、福島、東北、被災地に限らず、日本各地に共通するものであり、解決方法を導き出すべく、広く共有されるべきものでした。これらの課題は【いのち】【くらし】に集約されます。これらは各地の博物館・美術館・資料館・記念館を含むミュージアムの活動の核となっているものであり、ミュージアム

に限らず、さまざまな団体、機関も大切にしていることです。東日本大震災後、新たに浮上してきたミュージアムの使命。それは【いのち(ライフ)】と【くらし(ライフ)】に再び誠実に向き合うことと捉え、ライフミュージアムネットワークでは、同じ志を共有するネットワークを強化・拡大することでミュージアムの社会的使命を拡張していきます。

2020年度は、これまでの活動を継続するとともに、ソーシャルインクルージョン、地域資料の利活用とネットワーク構築、地域アイデンティティの再興を軸に、ライフ(いのち・くらし)に向き合うミュージアムの実践を行いました。



本記録集の作成にあたって、たくさんの方のご協力をいただきました。

小池アミゴさんのリサーチに応じてくださった奥会津の5つのミュージアムのみなさん、

小池アミゴさんが奥会津で出会ったみなさん、

宝物のような言葉と作品をくださった小池アミゴさん、

ステキなデザインに編んでくださった江畑芳さん、

そして本記録集を手にとってくださったみなさんに

心から御礼申し上げます。

令和2年度文化庁地域と共働した博物館創造活動支援事業
ライフミュージアムネットワーク 2020
奥会津スタディツアー記録集「奥会津のミュージアムを巡る」

テキスト (2-5p、8-9p、14-15p、22-23p、28-29p、34-35p) 小池アミゴ
ペインティング・ドローイング 小池アミゴ
編集・デザイン 江畑芳

編集 ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局
(川延安直・小林めぐみ)
発行 ライフミュージアムネットワーク実行委員会
印刷 北斗印刷株式会社